

図書館通信

第9号 6月17日(火)
名古屋経済大学
高蔵高等学校・中学校 発行

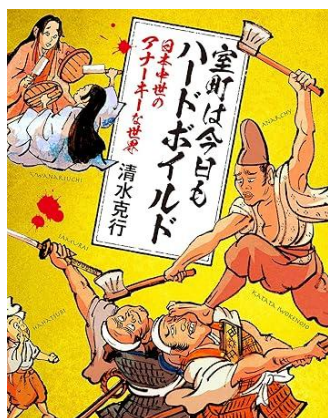
読書会を終えて

6月12日(木)の放課後、図書部主催の「第1回読書会」が図書館2階・多目的コーナーにて開かれました。参加者は生徒・教員の4名と少なかった分、**「全員と話をすることができたので、興味深い時間を過ごせました」**とのコメント。1時間ほどの読書会でしたが、有意義なものになったかと思います。参加者からいただいた感想を以下に紹介します。



★人数が少なくても、だからこそ、ある意味、おもしろみを感じることができました。どう転んでも楽しめる読書会。読書会のおもしろさに共感できる人が増えてくると、うれしいですね。

★今回、読書会に初めて参加しました。自分がいつもは読まない本が紹介されていました。「読んでみたい」と思える本に出会え、自分の関心が広がったように感じました。



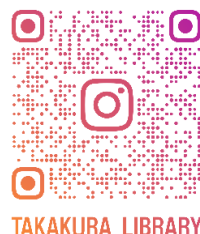
私が今回の読書会で紹介したのは、清水克行『**室町は今日もハードボイルド 日本中世のアナーキーな世界**』(新潮文庫、2024年)という歴史エッセイです。いくつか書名がつけられていますが、中世を生きた人々の日常に焦点を当てて、16のテーマが題材として取り上げられています。例えば、「ムラのはなし」、「年号のはなし」、「婚姻のはなし」、「荘園のはなし」といった、高校の日本史でも扱うようなテーマが並んでいます。他方で、「悪口のはなし」、「山賊・海賊のはなし」、「人身売買のはなし」、「切腹のはなし」、「呪いのはなし」のように、通常の授業では勉強しないテーマもあります。著者によると、**「これ一冊で日本中世社会の概略が理解できるよう」**、さまざまなテーマが扱われているとのこと

です。文章は分かりやすく、論理展開も明確なので、飽きずに読むことができます。図書館に所蔵されているので、借りてみてください。

私が本書で興味を最もひかれたのは、「落書きのはなし」です。日本人がドイツやイタリアの教会に「落書き」していたことに対して、異常なほどのバッシングが一時期ありました。そのことに触れながら、一方の中世では、数多くの「落書き」が寺社の建物に残されており、それらの事例が紹介されています。どのような「落書き」が多いかは、本書をぜひ読んでもらいたいのですが、このテーマに関する結論の中で提示された次の文章に目がとまりました。**「異文化を学ぶことの効能の一つは、自分たちが絶対的な“正義”や“常識”だと信じていることが、時や場所を変えれば必ずしもそうではないということを知る、ということだろう。それによって私たちは、自分たちとは異なる価値観に対して“寛容”になることができる。」**前号の通信と関係してきますが、多様な価値観を尊重する思考を育む手法が、ここで記されています。

著者は本書を通じて、中世の社会を学ぶ意義について、次のように論じています。**「中世を生きた人びとの最大の魅力は、同じ日本列島に住みながら彼らが私たちの「常識」**

高蔵図書館Instagramはこちら⇒



や「道徳」から最も遠いところにいる存在であるという点にあり、彼らの社会を学ぶ面白さは、そんな私たちが安住している価値観を揺るがす破壊力にあるといえるだろう」。だからこそ、中世の社会を学ぶことによって、私たちは、「みずからの生きている社会が絶対ではないと認識」でき、それと異なる価値観を持つ人たちにも寛容となれるのではないか。もしくは、「現代社会の不寛容を和らげるトレーニング」を積めるのではないか、と言います。

中世の社会を学ぶ意義をこのように明示する著者の議論に深く引き込まれます。「歴史」－日本であれ、外国であれ、また、中世であれ、他の時代であれ－を学ぶ意義は、「多様性（ダイバーシティ）」を認める思考を育てること。そう考えられないでしょうか。

＜読書会で紹介された主な本＞

- ジョナサン・スウィフト（山田蘭訳）『ガリバー旅行記』（角川文庫、2011年）
- 内田樹・山崎雅弘『動乱期を生きる』（祥伝社新書、2025年）
- 麻生羽呂・篠原かをり『L I F E＜ライフ＞ 人間が知らない生き方』（文響社、2016年）

下記のチラシは、7月12日（土）まで、【戦争と平和の資料館 ピースあいち】（名古屋市名東区よもぎ台 2-820）にて開催されている企画展の案内です。6月23日（月）は沖縄戦の事実上終結した日で、沖縄県によって「慰霊の日」として定められています。この日の式典では、知事が「平和宣言」を読み上げ、県内の代表児童・生徒が「平和の詩」を朗読します。テレビや新聞などでの報道にご注目ください。

ピースあいち企画展

沖縄から平和を考える 沖縄の基地問題は私たちの問題

2025年
5月27日火～7月12日土

開館時間 ● 11:00～16:00
(最終日は15:00まで)

休館日 ● 日曜日・月曜日

入館料 ● 大人300円 小中高生100円

会場 ● 3階展示室 2階プチギャラリー

「台湾有事」という言葉が盛んに取り沙汰されている中、2022年12月に閣議決定した安保3文書には、敵基地攻撃能力（反撃能力）の保有が明記されました。有事を想定した大規模な日米共同統合演習も毎年実施されています。沖縄にとどまらず、九州、本州へも米軍基地・自衛隊本土基地が強化され、拡大していています。

政府の防衛力整備計画は約43兆円規模と大幅に拡大され、スタンド・オフ防衛（離れた位置から防御する）能力、統合防空ミサイル、無人機には日本企業が開発を行っています。

沖縄離島住民の島外避難の図上訓練まで行い、これは沖縄住民に沖縄戦前夜を思い起こさせるものでした。

準常設展パネルで沖縄の歴史を振り返り、現状を考えていただけたらと思います



●日米共同統合演習（キーンソード25）

写真出典（3枚とも）：米国防省画像配信サイト dvids



▲自衛隊と米軍による滑走路被害復旧訓練
—自衛隊那覇基地 2024年10月27日



▲沖縄出砂島射撃訓練場に向かう自衛隊
(中央)と米軍(右)
—米軍普天間飛行場 2024年10月28日



▲自衛隊(右)と米軍(左)による米軍
HIMARS実射訓練—自衛隊矢野別演習
場 2024年10月23日